

福島の 児童文学者20

こ ぎ 美 恵 子
こ う 上 崎

さわやかで人の心が潤うようなファンタジーを子どもたちに届けてくれた上崎美恵子の生涯をたどってみた。

「福島との関わり」

大正十三年（一九二四）十一月十五日福島県二本松市に生まれ、阿武隈川のほとりで幼児期を過ごす。六歳の時一家で上京する。昭和十五年（一九四〇）青山学院高等女子部を卒業、同学院女子専門部一年修了、休学し東京原宿の自宅に父親と住んでいた。先に疎開していた母と妹たちを訪ねて二本松を訪れていた時、空襲で家が焼失し二本松に疎開する。生まれ故郷とはいえず、知り合いの少ない中でさびしい思いをしていた時、二本松のちようちん祭りをみて、「ふるさと二本松」を実感したという。

「児童文学との出会い」

戦後の混乱期に、結核で六年間国立中野療養所で療養生活を送る。このとき療養所にある図書室の本を読み尽くし、小児結核の患者用の子ども本まで読みあさったという。ここでアンデ

ルセンや宮沢賢治など内外の童話に出会い児童文学の魅力に惹かれ、ファンタジーを書きはじめる。昭和三十一年（一九五六）頃から少しずつ雑誌などに発表していく。大人の小説も同人誌に二作発表し、推理小説の勉強もしていたが、「童話は人生の楽しさ、美しい面をきわだたせる作業ではないか」と、しだいに児童文学の世界に入っていく。

【作 品】

単行本の第一作目は『星からきた犬』（一九七二）。その後、『まほうのあかちゃん』（一九七二）を発表。様々な姿をみせる海に命を与え七つのメルヘンに仕立てた『ちゃぶちやっぶんの話』（一九七五）で第二十三回サンケイ児童出版文化賞、同作品と『まほうのペンチ』（一九七五）で第六回赤い鳥文学賞を受賞。『だぶだぶだすき』（一九八四）で第九回日本児童文芸家協会賞を受賞。『ルビー色のホテル』（一九九四）で第六回ひろすけ童話賞を受賞している。尊敬してやまない浜田広介の名がついた文学賞の受賞作は、バブル時代の環境破壊を題材にしたもので「明るく未来に向う意欲を持つよう」という子ども読者へのメッセージが込められている。

「上崎美恵子の世界」

上崎美恵子の作品には動物が出てくることが多い。イヌ・ネコ・キツネ・キンギョ・ウサギなどが話をしたり不

思議な魔法をみせてくれたりする。

おばけのお話も多い。長い療養生活の間に我慢することを覚え、おばけもこわくなくなったという。だが、上崎美恵子の作品に登場するおばけは、どこか愛敬があるユーモラスなものである。『月夜のめっちゃらくちゃら』（一九七七）は、海と南の島を舞台に、泣き虫でくいしんぼうのちびのおばけめちやらくちゃらのほのほとしたお話である。「私は、じつはおばけがこわいのです」と雑誌『児童文芸』（昭和五十三臨時増刊号）に書いている。「だから、おばけは怖くないんだと自分に言い聞かせるために愛敬のあるおばけを登場させている」のだそうだ。

福島が舞台となる作品もいくつかある。『海からとどいたプレゼント』（一九八八）では、戦争のためオキナワの海に沈んだ少年の思いをかなえるため、不思議な力を持つ小魚・コバルトスズメが福島県二本松と思われる町までたずねてくる記述がある。このコバ

ルトスズメと少女とのめぐりあいと戦争という暗く重い影を描く物語は、上崎美恵子の代表作のひとつである。

一方、戦争を体験した者としての使命を持ち、ファンタジーの手法で戦争を伝えていきたいと、いくつかの作品を残している。以前住んでいたK市を舞台に戦争の傷跡を残す人々と子どもたちの関わりをミステリーで描く『海がうたう歌』（一九七四）『まほろしのバス』など。

今年刊行された『愛蔵版別ふるさと児童館・福島の童話』の中に「赤のまんま」という作品が収録されている。東京大空襲で東京原宿の我が家が燃えた日に、父との再会を祝うため赤まんま（お赤飯）を炊いて二本松のお城山に登り一家団欒の食事をしてしまった、という苦い経験を書き下ろしている。『海からとどいたプレゼント』の中に同じ設定の箇所がある。上崎美恵子にとって戦争は終わっていないかったということだろう。

この『福島の童話』の刊行を待たずに、平成九年（一九九七）九月二日、七十二歳で亡くなった。「いつかまた二本松のちようちん祭りが見たい」といつていたが、その願いはかなえられたのだろうか。

○参考文献

『日本児童文学者大事典』

『児童文芸』『こどもの本』 他

